

平成26年度研究成果報告書《平成25・26年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	35	都道府県・指定都市名	山口県	研究課題番号・校種名	5(2)小・中学校				
				領域名	へき地教育				
研究課題	新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究 (2) へき地教育に関する指導方法等の工夫改善に関する実践研究 ① 9年間を見通した系統的・計画的な体験活動を実施することにより、社会体験不足を補いながら児童生徒の視野を広げる。 夢を抱く・見つける ② ほとんどの学年が1～2人という特性を生かし、教師と児童生徒1対1の利点を生かす授業づくりと、1対1の課題を克服する授業づくりを行うことにより、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を伸ばす。 夢を広げる								
ふりがな 学校名	はぎしりつあいしましやう ちゅうがっこう 萩市立相島小・中学校								
小 学 校	学校・地域の特色及び実態等								
学 年 等	1	2	3	4	5	6	特別支援	計	・離島の極小規模校で、小・中学校併設である。 ・島に高校はなく、中学校卒業後は、親元を離れて生活することになる。 ・狭い地域で生活しているため、社会体験が不足している。 ・関わる人間が固定されているので、初対面の人とのコミュニケーションが苦手である。 ・ほとんどの学年は、同学年の児童生徒がいないため、多様な意見に触れる機会が乏しい。
児 童 数	1	0	1	1	1	1		5	
単式・複式	単		複式	複式				3	
中 学 校									
生 徒 数	1	2	1					4	
単式・複式	単	単	単					3	
H26.5.1現在	へき地学校の級(4) 教員数(小:5, 中:6)								
所在地(電話番号)	山口県萩市相島9番地 (0838-25-8600)								
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://edu.city.hagi.lg.jp/aishima-e/								
研究のキーワード	小・中連携, 系統性・計画性のある体験活動, 少人数授業の充実								
研究成果のポイント	・9年間を見通した効果的かつ効率的な体験活動の実施方法 ・教師と児童生徒1対1の授業における効果的な指導方法								

1 研究主題等

(1) 研究主題

子どもたちの夢をはぐくみ、社会を生き抜いていく力を育成する指導方法の工夫・改善
 ～へき地小規模校における高度な小・中連携を中心として～

(2) 研究主題設定の理由

本校は、離島の極小規模校である。このような環境の子供たちにも大いなる夢を抱かせ、社会を生き抜いていく力を身に付けさせなければならない。そのために本校の特徴を生かして、他校にない高度で多様な小・中連携の可能性を探り、義務教育9年間の指導体制、カリキュラム編成の工夫・改善、日々の教育活動の充実を図ることとした。

子供たちが夢を抱き、実現していくためには、自らの視野を広げる未知への興味・関心、他者と適切な人間関係を築くためのコミュニケーション能力、夢の実現のための実行力や最後までやり遂

げる力などの社会を生き抜いていくための力が必要である。そのような力を身に付けさせるため、次の2点にしぼって研究を進めることにした。

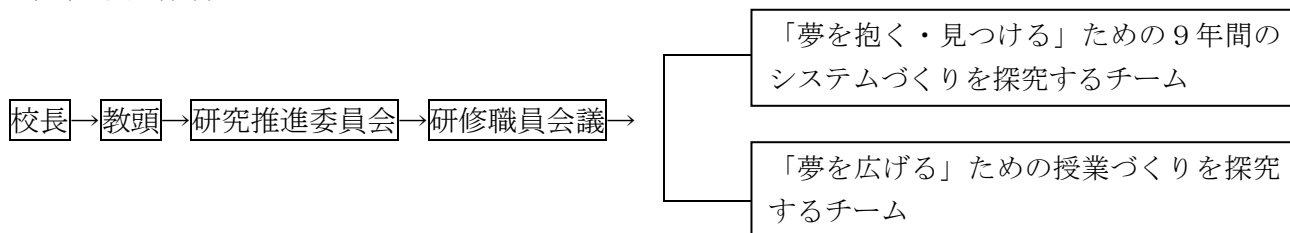
①夢を抱く・見つける

小・中学校9年間の体験活動をどのように計画することで子供たちがより広い視野で夢を抱き、見つけることができるのかを探る。

②夢を広げる

夢を叶えるためには、子供たちがどのような道を歩むにせよ必ず必要とされる能力、思考力・判断力・表現力等の獲得も必要である。日々の授業の中でどのような工夫が必要なのかを探る。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成25年度	①研究計画の立案 ②研究主題についての共通理解と研修 ③授業研究会 (20回) 【複式・少人数授業】 ④平成25年度教育課程指定校事業担当官指定校訪問 ⑤運動会・文化祭のアンケート結果の考察と課題検討 ⑥講師を招聘し、複式、少人数授業についての研修会 ⑦教育課程指定校事業研究協議会報告資料作成 ⑧萩市立相島小・中学校研究集録作成 ⑨来年度の取組について研修
平成26年度	①研究計画の立案 ②研究主題についての共通理解と研修 ③講師を招聘し、少人数授業について研修会 ④授業研究会 (30回) 【少人数授業、道徳の時間】 ⑤研究紀要作成 ⑥へき地教育研究発表会 (公開授業・研究発表等)、担当官指定校訪問 ⑦体験活動の振り返り、アンケート結果の考察と課題検討 ⑧来年度の取組について研修

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①夢を抱く・見つける

- 9年間を見通した系統性、計画性のある体験活動の工夫
- 児童生徒に自分自身の成長を実感させたり、全教職員が一貫した指導が行えるようにしたりするために、各体験活動で発達段階に応じたスモールステップの達成目標を設定
- 児童生徒にとってより効果的な体験活動とするために、体験活動の前後の道徳の時間を活用

②夢を広げる

- 少人数授業における効果的な指導方法の工夫

(2) 具体的な研究活動

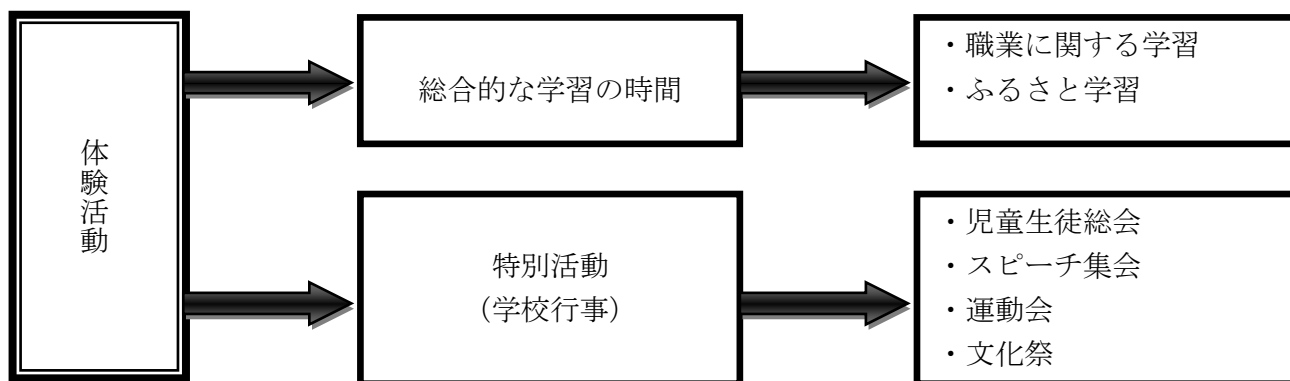
①夢を抱く・見つける

「夢を抱く・見つける」ためには、多くの人やものに関わる中で、広く社会に目を向け、自分の生き方、自己実現の方策を探っていかなければならない。そこで、小・中学校が併設されている特徴を生かし、9年間を見通した体験活動（下図参照）を系統性・計画性のあるものとする事で、それぞれの体験活動が有機的に結びつき、離島、極小規模という難点を補い、効果的かつ効率的に児童生徒に夢を抱かせ、見付けさせることができるようにした。

また、夢を実現させるためには「社会を生き抜いていく力」が必要である。この「社会を生き抜いていく力」とは、本校では「未知の世界へ飛び出す意欲」「コミュニケーション能力」「夢へ踏み出す実行力」「最後までやり遂げる力」（以下「4つの力」）と捉え、これらを小・中学校9年間で身に付けさせたいと考えた。そこで、「4つの力」それぞれを身に付けた児童生徒像を描き、発達段階に応じたスモールステップの達成目標を設定した。児童生徒自身に達成目標を意識させ、確実にステップを登らせて達成感を味わわせることで、自己肯定感も高まり、夢の実現に大きく近づくことができるようにした。また、達成目標が明確になることで、全教職員が一貫したきめ細かな指導が可能となった。

体験活動の前後には、体験活動と関連した題材等による道徳の時間を実施した。これにより、体験活動が道徳性を発揮する場面となったり、体験活動の中での経験から道徳的な価値に気付いたりするなど、体験活動が児童生徒にとってより価値のあるものになった。

体験活動後には、児童生徒に振り返りをさせるとともに、教員や保護者、地域住民にアンケートを行い、児童生徒の成長した点や体験活動のあり方等の評価を行った。



②夢を広げる

将来、社会に出る時に自分の可能性を見つけ、夢を広げるためには、思考力・判断力・表現力等が要求される。そこで、授業の中で相島小・中学校ならではの特色を生かした指導をしていくことにより、児童生徒の思考力等を育てようとした。本校は、小・中学校が併設された極小規模校である。極小規模校では、次のような利点と課題があげられる。

○極小規模校の利点

- ・児童生徒の興味関心や学習内容の習熟の程度に配慮したきめ細かな指導ができる
- ・一人ひとりの活躍の場が多い
- ・児童生徒に合った教材を用意できる

○極小規模校の課題

- ・多様な意見に触れる機会が少なく、思考を広げることが難しい
- ・意見を比較したり、判断したりする機会が少ない

特に本校では、ほとんどの学級の児童生徒数が1名であることから、授業づくりの視点を「1対1の利点を生かした授業」と「1対1の課題を克服する授業」の2点にし、研究授業を重ねた。研究授業前には、小・中学校の教員全員で指導案検討を行ったり、模擬授業を実施したりした。また、参観日には、保護者や地域住民にアンケートを行うとともに、結果を考察し授業改善につなげた。「1対1であっても、しっかりとした会話をを行う指導」、「児童生徒の実態に応じた課題の設定」、「多様な意見に気付かせるためのバーチャルクラスメイトや児童生徒役の教員の授業への参加」等、様々な方法を工夫し、効果のあった取組については、全教職員が実践することとした。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・体験活動を系統的、計画的に実施できるようにカリキュラムを編成し、実践することができた。その結果、教員は、9年間のつながりを意識して指導に当たることができた。また、児童生徒は先輩の体験活動の様子を見て、自分たちが今後行う活動について見通しをもつことができた。
- ・児童生徒は、スピーチ集会や職場体験等の体験活動を通して、身のまわりの出来事や知らなかった職業について学び、社会的な視野を広げることができた。
- ・授業や体験活動の中で、児童生徒が発表する機会を多く設定した結果、人前でも自信をもって堂々と発表することができるようになった。
- ・1対1の利点を生かす授業づくりと1対1の課題を克服する授業づくりをめざした研究授業を数多く実践することで、児童生徒の実態に応じた課題を設定する等の利点を生かす手立てや、バーチャルクラスメイトやICTを活用する等の課題を克服する有効な手立てが見つかった。
- ・研究を小中合同、全教職員で進めることができた。その結果、研究について異校種からの意見を交換することで、研究を深めることができた。9年間を通して児童生徒に身に付けさせたい力を共通理解し、全教職員が同一歩調で指導に当たることが大切である。

(2) 課題

- ・他人とコミュニケーションを図るためには、自分から情報を発信するだけでなく、相手からの情報を正確に聞き取り、それに対して適切に応じる必要がある。今後は、児童生徒が聴く力を身に付け、質問に対する適切な受け答えができるようになるための取組を考えていく必要がある。
- ・授業を通して身に付けさせたい力を「思考力・判断力・表現力等」と設定しているが、思考力・判断力・表現力等とはどのような力をいうのか、もう一度、教員で共通理解を深めたい。そうすることで、児童生徒に身に付けさせたい力や身に付けさせるための手立てがより一層明確になり、研究を深めることができると考える。
- ・児童生徒にとって効果的な体験活動となるように、道德の時間以外に、学級活動で振り返りをするなど、事後指導のあり方についても検討する必要がある。
- ・より充実した体験活動を実施するために、体験活動ごとに、児童生徒、教職員、保護者、地域住民からアンケートを取り、達成目標などを評価、改善していく必要がある。

(3) 指定期間終了後の取組

- ・児童生徒に、成長した自分に気付かせるよう体験活動の振り返りについて検討するとともに、教員や保護者、地域の意見を考察し、より効果的な体験活動となるように評価、改善を継続する。
- ・教員の共通理解に基づき、児童生徒の思考力・判断力・表現力等がどの程度伸びたのか評価できるような仕組みをつくる。